



的な政治への関与の一環として囚人の運動に深くコミットしたが、そのことは、もう一つの代表作『監獄の誕生』とも関係している——どのような関係かを解きほぐすのは難しいだろうが——ようだ。

本書はそれ以外にもいろいろな問題に触れているが、個人的に興味を引かれたのは大学教授への就職をめぐる問題である。二〇世紀フランスを代表する高名な大学者であり、コレージュ・ド・フランス教授という権威あるポストに就いた学者にしてはやや意外なことに、若い時期には就職に関してあまり恵まれなかったようであり、学界政治・学閥のよいうなことで苦勞したらしい（この点でも、今野元『マックス・ヴェーバー』を思い起こさせるところがある）。そのように苦勞したフーコーは、アカデミズムの世界での正規職を得るために意外なほど熱心に求職活動を行ない、オーソドックスな学者の世界の作法にも忠実に従っていたらしい。学外では「極左」的な活動にコミットし、そうした運動に理論的支柱を提供する一方、学内ではオーソドックスな教授として振る舞うという二面性があったように見えるが、そのことをどう受け止めるかは微妙である。――

本書を読んだからといって、フーコー理解がどのくらい深まるかは何とも言えない。とにかく私にとっては、フーコーが多少身近に感じられるようになるという恩恵があった。

(二〇二〇年九月一〇日にフェイスブックに投稿した文章)。